2021 年度「国際哲学特講」オンライン海外研修の報告

（法政大学文学部哲学科　安孫子信）

目次

§1　研修の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p 1
§2　研修の内容　　　　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p 3
§3　研修についての参加学生の声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p 5
§4　研修についての所感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p 8
§5　スクリーン・ショットで見る研修の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・p 10

§1 研修の概要

■2021 年度「国際哲学特講」（秋学期 2 単位）では、例年通り、学期最後 2 月初めに、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力を得て、ドイツのハイデルベルグ大学（ハンス・クレーマ先生担当）およびフランスのストラスブール大学（黒田昭信先生担当）と合同ゼミを実施した。コロナ禍が引き続き、昨年度と同様に、学期内の通常授業だけでなく、海外研修自身も zoom 遠隔でとなったが、昨年度の経験も生かして、期待を上回る成果を収めることができた。

例年通り、2 月の合同ゼミを含む半期の授業全体が 3 大学の連携の下で行われた。2021 年 8 月に翌年 2 月の合同ゼミでのテーマを共同で選定し、その後、9 月から翌年 1 月まで、それぞれの大学では合同ゼミに向けて準備の授業を行った。その際、昨年度に続き本年度も、ストラスブール大学と法政大学との間では、9 月から 1 月まで、月一回各 60 分、zoom 遠隔で合同授業を実施した。加えて、両大学の学生たちは、同じ期間に、zoom 遠隔でのグループ対話を、毎週 1 回 60 分を目処に実施した。

以上の準備を経て、2 月 2 日から 9 日までの研修期間中には、日本時間のほぼ 18 時〜21 時（ヨーロッパ時間 10 時〜13 時）に、zoom 遠隔で以下のプログラムを実施した。

2/2（水）【ハイデルベルク大学との交流会】
2/3（木）【ハイデルベルク大学との合同ゼミ】
2/4（金）【ストラスブール大学若手教員によるレクチャー】
2/5（土）【ストラスブール大学との合同ゼミ 1】
2/ 6 （日）【ストラスブール大学との合同ゼミ 2】
2/ 7 （月）【CEEJA 担当者の案内でアルザスのヴァーチャル・ヴィジット】
2/ 8 （火）【法政大学若手教員によるレクチャー】
2/ 9 （水）【国際哲学特講 OBOG との対話】

◆研修のポスターおよびスケジュール表

２０２２年２月　国際哲学特講 Timetable（敬称略）　　基本使用言語：日本語　　各日総合司会：CEEJA徳江（調整有）　　CEEJA / version DEF 31.01.2022

2月2日（水）次第・参加者	JST	CET		進行
	開始時間		所要時間	
ハイデルベルク大　交流会	18:00	10:00	5min	イントロダクション　安孫子僖（法政大学）、ハンス・マーティン・クレーマ（ハイデルベルク大学）以下教員より
法政大学１３名＋ハイデルベルク大学１０名前後	18:05	10:05	7min	ハイデルベルク紹介ビデオ（徳江）
日）安孫子・君嶋　独）クレーマ　仏）マティアス・徳江	18:15	10:15	60min	自己紹介一人3min　①自分は何を・なぜ学んでいるのか　②自分が見る日本・ドイツとはどんな国か　③趣味
自己紹介＋α	19:15	11:15	10min	教員からのコメント
ファシリテーター：安孫子	19:25	11:25	30min	ブレイクアウト　5グループ(4ー5人程度) x 15min x 2回　①政治に関心があるか？②自分の将来をどう考えているか？
	20:00	12:00	10min	総括
2月3日（木）	JST	CET		
ハイデルベルク大　合同ゼミ	17:15	09:15	10min	イントロダクション　レギーヌ・マティアス（CEEJA・ボーフム大学）冒頭あいさつ　以下教員より
法政大学１３名＋ハイデルベルク大学１４名	17:25	09:25	30min	日／ゼミ発表　『物語日本国憲法』９章　中曾根内閣とは何だったのか
日）安孫子・君嶋　独）クレーマ　仏）マティアス・徳江	17:55	09:55	20min	独／修士学生以下によるコメント（日本の自民党の改憲推進について・９条について外から見て率直に感じていること等）
テーマ『日本国憲法第９条』	18:15	10:15	120min	ブレイクアウト(30min) + グループからの報告（60min）+全体討論（30min）
ファシリテーター：クレーマ	20:15	12:15	10min	総括・講評
2月4日（金）	JST	CET		
若手日本語教員講演会	18:00	10:00	90min	笠原志保（ストラスブール大学）
法政大学１３名	〃	〃		『多言語による自己表現　－ことばへの外側からのアプローチ－』
日）安孫子・君嶋　仏）笠原・徳江	〃	〃		"Multilangual self-expression - Approach to words from the outside - "
ファシリテーター：君嶋	19:30	11:30	30min	質疑
2月5日（土）	JST	CET		
ストラスブール大　合同ゼミ1	18:00	10:00	5min	冒頭の辞
法政大学１３名＋ストラスブール大学	18:05	10:05	60min	基調講演　黒田昭信(ストラスブール大学)『比較文化の方法 - Veracity と Loyalty、そして「わかる」と「理解する」の違いをめぐって』
日）安孫子・君嶋　仏）黒田　CEEJA	19:05	11:05	60min	ゼミ発表　日仏合同３グループ 20min x 3　A「忠誠を日本の武士道とフランス・ウクライナの騎士道の視点から扱う」
テーマ『武士道』	〃	〃		B「武士道での女性の地位」　C「武士道での名誉や恥への敏感さと慈悲との関係」
ファシリテーター：安孫子	20:15	12:15	50min	ディスカッション
	21:05	13:05	10min	１日目総括
2月6日（日）	JST	CET		
ストラスブール大　合同ゼミ２	18:00	10:00	5min	冒頭の辞
法政大学１３名＋ストラスブール大学	18:05	10:05	60min	基調講演　安孫子僖（法政大学）『「武士道」と近代日本』
日）安孫子・君嶋　仏）黒田	19:05	11:05	40min	ゼミ発表　日仏合同２グループ 20min x 2　D「自死について」E「自制について」
テーマ『武士道』	19:50	11:50	50min	ディスカッション
ファシリテーター：黒田	20:40	12:40	30min	２日目総括・全体共有
	21:10	13:10	---	懇親会
2月7日（月）	JST	CET		
CEEJAレクチャー	18:00	10:00	90min	徳江純子（CEEJA）
法政大学１３名	〃	〃	+vidéo	『アルザス史とバーチャル・ビジットー記憶と記録』　付・アルザス・モーゼル戦跡記念館見学ビデオ
日）安孫子・君嶋　仏）徳江・CEEJA	〃	〃		"History of Alsace, virtual visit - Memory and record"
ファシリテーター：徳江	19:40	11:40	20min	フリー発言　※どこかのタイミングで総領事メッセージ？
2月8日（火）	JST	CET		
若手研究者講演会	18:00	10:00	90min	高田圭（法政大学）
法政大学１３名	〃	〃		『トランスナショナルに考える』
日）安孫子・君嶋　日独）高田　仏）徳江	〃	〃		"Thinking Transnationally"
ファシリテーター：君嶋	19:30	11:30	30min	質疑
2月9日（水）	JST	CET		
ゼミ修了生OGOBとの意見交換会	18:00	10:00	5min	イントロダクション　引間淑朗（卒業生・Apple）
法政大学１３名	18:05	10:05	90min	受講者１３名＋卒業生５名を３グループに分け30min x 3回の議論
日）安孫子・君嶋　仏）徳江　各国）卒業生引間以下５名	〃	〃		①キャリアデザインと働き方②進学③留学・フランスなど外国に関すること④哲学・卒論
ファシリテーター：引間	19:35	11:35	10min	発表準備（休憩）
	19:45	11:45	15min	各グループより発表　5min x 3回
	20:00	12:00	10min	教員による総括

§2　研修の内容

2/2（水）

【ハイデルベルク大学との交流会】互いに自己紹介をした後、グループに分かれて、「勉強での自分の関心」、「互いの国についての自分の関心」、「政治での自分の関心」などをめぐって自由に意見交換。

2/3（木）

【ハイデルベルク大学との合同ゼミ】ボッフム大学/CEEJA のレギーネ・マチアス先生から、国際交流学習の意義に触れた開会挨拶。ついで、クレーマ先生から、今年度のテーマである「日本国憲法第 9 条」問題の重要性と、それをめぐってのハイデルベルク大学での半期の検討の報告。ついで、法政グループから「日本国憲法第９条」、また、ハイデルベルク・グループから「自民党編『憲法・自衛隊のおはなし』」とそれぞれ題された発表。つづいて、まずグループに分かれて、さらに全体で討論を行った。9 条をめぐる日本での改憲論の、議論としての脆弱さが、日独双方からかなり的確に指摘されていた。

2/4（金）
【ストラスブール大学若手教員によるレクチャー】ストラスブール大学日本学科の笠原志保先生（日本語教育）による「多言語による自己表現―ことばへの外側からのアプローチ」と題されたレクチャー。ご自身、異国語であるフランス語で劇作を続ける笠原先生から、自分の言語の外に出るという、ご自身の経験からの、言語をめぐる有意義なレクチャーが行われた。

2/5（土）
【ストラスブール大学との合同ゼミ１】合同ゼミの今年の全体テーマは新渡戸稲造『武士道』。両大学の学生の混成メンバーから成る５グループが、そこまで２ヶ月をかけて準備してきたパワポを順番に発表し、それをめぐって議論。この日はまず黒田先生から、「比較文化の方法―veracity と loyalty/「わかる」と「理解する」の違いについて」と題する基調講演。その後、3 グループが、順に、「武士道における忠誠」、「現代のカップルに生き残っている「武士道」の面影－女性の立場を中心とする考察」、「名誉について」の題で発表した。

2/6（日）
【ストラスブール大学との合同ゼミ２】この日はまず安孫子が「武士道と近代日本―西周と新渡戸稲造」の題で基調講演を行い、その後、2 グループが、順に、「現代における切腹の意志―武士の切腹は現代にどのような影響を与えているか」、「自制」の題で発表。その後、黒田先生から 2 日間の議論のまとめが行われ、それを手がかりにして、全体で活発な議論を展開した。

2/7（月）
【CEEJA 担当者の案内でアルザスのヴァーチャル・ヴィジット】この日はまず、在ストラスブール日本国総領事の赤松武さんから、この合同ゼミへの歓迎挨拶。その後、CEEJA の徳江純子さんから、「アルザス史とヴァーチャル・ヴィジット―記憶と記録」のタイトルで、パワポと映像を用いたアルザスの歴史と地理（旧跡名所）のレクチャー。国境地帯であるアルザスの地理的・歴史的な特異性、つまり、そこでの幾多の戦争の悲劇が語られ、まさにそれゆえに、アルザスが今日、世界に対して担っている役割が説明された。

2/8（火）
【法政大学若手教員によるレクチャー】法政大学国際日本学研究所の高田圭先生（国際日本学）による「トランスナショナルに考える」のタイトルでのレクチャー。ご自身の長年の海外での経験に基づき、national や international、global とは異なる transnational ということについて、詳しく説明がなされた。それはまさに、この国際哲学特講の意義に触れるものでもあって、レクチャー後には活発な質疑応答が行われた。

2/9（水）
【国際哲学特講 OBOG との対話】プログラム最終日。国際哲学特講の OBOG であり、海外でも活躍している OBOG を交えての、グループまた全体での対話。海外で生きていく力が今後、日本社会でもますます求められようということが強調されていた。

§3　研修についての参加学生の声

今回の研修について、直後に寄せられた学生たちの声から、4 つを転載する。

■////////////////////A/////////////////////

今回の国際哲学特講を通してよかったと思った点は、フランスの人たちとのつながりを持てたことです。普通に暮らしていれば、絶対交わることがない人たちと同じことについて考え、話せるというのは、とても素晴らしいと改めて感じました。私はフランス人が流ちょうに日本語を話す姿を見て、いかに自分たちが日本語だけで甘えてしまっているのか差を感じました。なんであんなに言葉を話せるんだろうと不思議に思うほど驚きました。自分は英語と第二外国語で韓国語をとっているだけで、そんなに話すことはできないのになんでだろうと感じました。わたしもフランスの人達を見習い、第三外国語を学んでみようと思います。来年もう一度国際哲学特講をとると決めたら、フランス語を習うのも面白いと感じました。

今回、フランス人、ドイツ人と話をして、加えて、現地に住む日本人の方との話など貴重な体験をしてとても参考になったし、同じ日本人でもこんな生き方をしている人がいるのだと刺激になった。海外で生きていくのは大変なことだと思うが、そこで自分のしたいことをしているのはもっとすごいことだと思うし、ほんとうに話が聞けてうれしいと思った。また自分たちの発表で、向こうの先生から褒められたこともすごくうれしかった。大学生活を通して、共同発表でほめられたのは、すごく貴重でとても記憶に残った。自分の人生の良い経験になったと思う。フランス、ドイツの人たちの話を聞いていると、そこでカップルになっているのがけっこうおおくて、日本じゃ考えられないと思った。

今回の活動を通して海外研修に実際に行ってみたくなったし、コロナさえなければと感じてしまうが、学習面ではとても満足している。気づいたことは、日本人はとっても時間を気にしているということである。フランス人と zoom をするときに、最初らへんはほぼ毎回遅刻してきていた。決して責めたいわけではなく、国によって違うと気づかされた。自分も時間にとらわれない生き方をしたいと感じた。もっと自由に生きていいんだと感じるようになったし、生きてみたいと感じた。

問題であると思う点は特にはないと感じる。私が感じる問題とは問題ではなく、違う国の

人が交われば必ず生じるものであるギャップのようなものであると思うし、問題はないと思った。普段なら問題であるとしてしまいそうなところも、異文化交流をしている中では、それは新たな発見であると感じた。今回を通して自分は成長できたと感じている。新たに友達もできたし、互いの国の良さにも気づくことができたからである。フランス、ドイツも好きになれたし、日本自体もすきになった。自分たちの発表にも日本の良さ、フランスの良さを出すこともできたし、互いの国の現状と昔を踏まえてできたと感じている。日本の武士道は今も意味的なものではなく、形式的に残っているのだと感じた。そのころは意味があって神聖でも、それは年月をかけて形式的なものになり、いつしか誰も知らないものになってしまうと思う。我々には、昔からあるものを再確認し、それについてみんなで学んでいくべきであると感じた。そうしていかなければ、私たちにはなにも意味の分からない昔からの物だけが残り、それは何の意味もなさないからである。その様な機会をこの国際哲学特講で担っていると感じ、また来年もチャレンジしたいと思っている。今年取り組んだ内容でもいいし、また別のことについても知りたいと感じるので、意欲的に取り組めそうである。

■//////////////////////B//////////////////

私は今回、この授業を受講したことで、海外に対する敷居を下げることができたように思う。国際哲学特講では、国際という言葉が付くこともあって、フランスやドイツに行けないことが決まっても、研修の中に必ず海外を意識するための企画が存在していた。そして、そこでは笠原先生の授業や、OB の方々との対談が含まれていた。皆さんのお話を聞くと、海外へ行った理由や、行き方はひとそれぞれバラバラ。また、今も海外で生活をしている人や、留学を終えて今は日本で暮らしている人もいた。ただ、共通点として、皆海外へ行った経験を楽しそうに話していたように感じる。また、留学を遠ざける語学などの弊害に関しても、皆同じ悩みを抱えており、それを留学先で乗り越えた経験をたくさん聞くことができた。私は高校生のころに、大学では留学をしてみたいと考えたことがある。しかし、語学の問題や、差別の問題、そして漠然とした不安によって最近では留学したいとは考えなくなっていた。ただ、今回国際哲学特講を受講したことによって、ほとんどの方々が自分と同じような問題や不安を抱えながら留学していたこと。そして、そのような方々も、そこからその問題を乗り越えたことで留学がいい経験として記憶に蓄積されているということを知ることができた。そしてこのことから、私でも留学をしようと思えばできるのではないかと感じるようになった。特に最後の OB の方とのお話では自分と同じ哲学科の先輩であるということもあり、余計にそう感じることができた。高田先生もおっしゃっていたように、海外留学を経験している、していた人たちとつながることによって、自分の中にある固定概念（法政大学で４年間を過ごしてそのまま就職する）を少し壊せたような気がする。

［良かった点］

先ほども述べたが、海外に対する敷居を下げることができた。また、フランスの方と意思疎通を行う経験ができたことで世界の人とつながる楽しさを知ることができた。

[問題だと思った点]
テスト期間と資料を本格的に作り始める期間がかぶっていること。

■//////////////////////C//////////////////////

私は、この半期の授業を通じて得たものが本当に多かったです。もともと欧州に行きたかった理由でこの授業を取っていたが、最後に行けなくてすこし残念でしたが、それでもこの授業を取って本当によかったと思います。

まず、知識に関しては今回は主に武士道と日本国憲法第九条について学んでいました。武士道について、それが武士階級の倫理、思想であって、現在の日本人とあまり関係がないように思ったが、授業を通じて、それがどういう風に生じたのか、現代にどのような影響を与えたのかということを深く考えることができました。武士道を学ぶことによって、日本人の思想、特徴をより理解することができると思いました。日本国憲法第九条について、まず、自分は外国人として、自分の国の立場に立って日本と他国の関係を見る場合が多いですが、授業では、日本人の学生との交流を通じて、日本人の 1 人 1 人がどう考えているのかを知ることができました。そこから日本人の平和思想や日本と他国の関係の複雑性を理解した上で、違う立場で日本の改憲問題を考えることができました。

国際哲学特講では、知識だけではなく、自分にとって、他国との交流ができるのはもっとも意味があるところだと思います。自分は留学生として、日本で何年間も生活していたが、日本人と深く交流する機会がなかなかありませんでした。また、欧州の方々とも接したことがなかったです。この授業を通じて、日本人の学生たち、フランスやドイツの学生たちと異文化交流ができました。毎週に zoom で同じグループの仲間たちと交流して、そして最後の研修の一週間前から、ほとんど毎日 zoom で一緒に発表するための準備をしていました。みんな一緒に準備をして、互いに練習することができて、本当に楽しかったです。

最後の研修では、フランス側の先生たちや法政側の先生たちから貴重なお話を聞かせていただきました。武士道や多言語による自己表現、トランスナショナル、アルザスの歴史から見る言語の問題など、どちらも興味深い内容でした。特に高田先生が言った、「他者から学び、自己を反省し、新たな自己を創造する」という言葉が印象的でした。自分は日本（外国）にいるから、日本人（外国人）、日本語（他言語）や日本文化（異文化）と常に接しています。コミュニケーションを通じて、異文化理解を深めることによって、その国、その国の人々に対する固定観念や思い込みを打破することができ、また新たなアイデンティティを生み出すことができると感じました。

また、研修の最後の日に行われた OB・OG との交流会でも、進学や就職に関する貴重な意見をいただきました。このような、様々な方と交流する機会を設けていただき本当にありがとうございました。これからも他人とのつながりを大切にして、他者から学びながら成長していきたいと思います。

■//////////////////////D//////////////////////

まずは半年間にわたり、国際哲学特講の授業では大変お世話になりました。
コロナウイルスの影響で実際にフランスとドイツに行くことが出来なかったのはやはり悔やまれますし、残念に思います。しかしオンラインになったとはいえ、大変有意義な時間を過ごすことができました。先生方のおかげだと思っています。
武士道に関しては正直これまで、学習する機会もなかったため新渡戸稲造の『武士道』を読むのも今回が初めてでした。新しく知ることが多くあったり、新渡戸の言う武士道の特徴などがよくわかりました。自分は最後の発表でも扱ったように、「女性の地位」という問題に関しては興味があるものでした。他の社会学の授業などでも似たような内容を学習したため、武士道時代の女性の地位、現代での女性の地位というのは比較できるものであるし考える事がたくさんあると思いました。

日本国憲法第九条に関しては、正直それ自体は知っていても理解が疎かだったと思います。中学、高校の時に憲法九条について扱うことはあったものの深く考えるということはなかったため、自分はこの授業を通してかなり理解が進んだと思っています。憲法改正などについてもこれから考えるべき問題であると思いました。自分の意見というものも持てるようになる必要があると思いました。

フランスの学生たちとは、何度も一緒に Zoom で話したりをして、武士道のことはもちろんのこと、その他の色々なことについて話ができて本当に楽しかったです。なかなか外国の人とお話をするという機会はないため貴重な機会、時間になりました。
何より自分が一番刺激を受けたことは、ドイツの学生もフランスの学生も日本語がとても上手で、多言語をあんなに話せること自体が凄いのに、日本の憲法や武士道について理解して、それを日本語で発表できることは本当に凄いことだと思いました。中には日本語の他にも中国語も勉強して話せるといったような人もいて、自分も何か頑張らなければならないなと思うことができました。自分自身の勉強不足や知識不足も今回のこの授業、合同ゼミを通して感じました。改めてみんなも相当頑張っているため自分も頑張ろうと思えました。
ありがとうございました。思い出に残る時間でした。
//

［※以上は、リアクション・ペーパー（「授業で良かった点と、問題として感じた点を書いて下さい」）として提出されたものを、学生から了承を得て転載しました。］

§４　研修についての所感

１．「今年は現地に行けそう」ということで学生は履修しており、結局、行けないことになった、その後の落胆は大きく、オンライン研修がうまく運ぶか案じられるほどであった。しかし、発表準備で共同作業をすることになった、ストラスブール大学の学生の存在は大きく、

法政の学生たちが改めて自分に鞭打つようになっていったのも、その存在のお陰だと思われる。ただ、そのような学生相互の関係の確立は、自然で、自ずからのものである必要があろう。時間の関係で、今回、関係作りに教師が介入せざるを得なかったが、それは少し辛抱が足りないことだったかもしれない。

２．加えて、今回の研修で、最後まで学生たちが集中を切らさずにいたのには、若い笠原先生や高田先生、そして OBOG たちの存在が大きかったと思う。とくに、二人の先生の話は周到に準備された、内容的にもすばらしいものであって、二人の先生の話に学生たちが何も感じずに済ますことはできなかったと思う。二人の先生がともに問題にしたのは national ということであった。

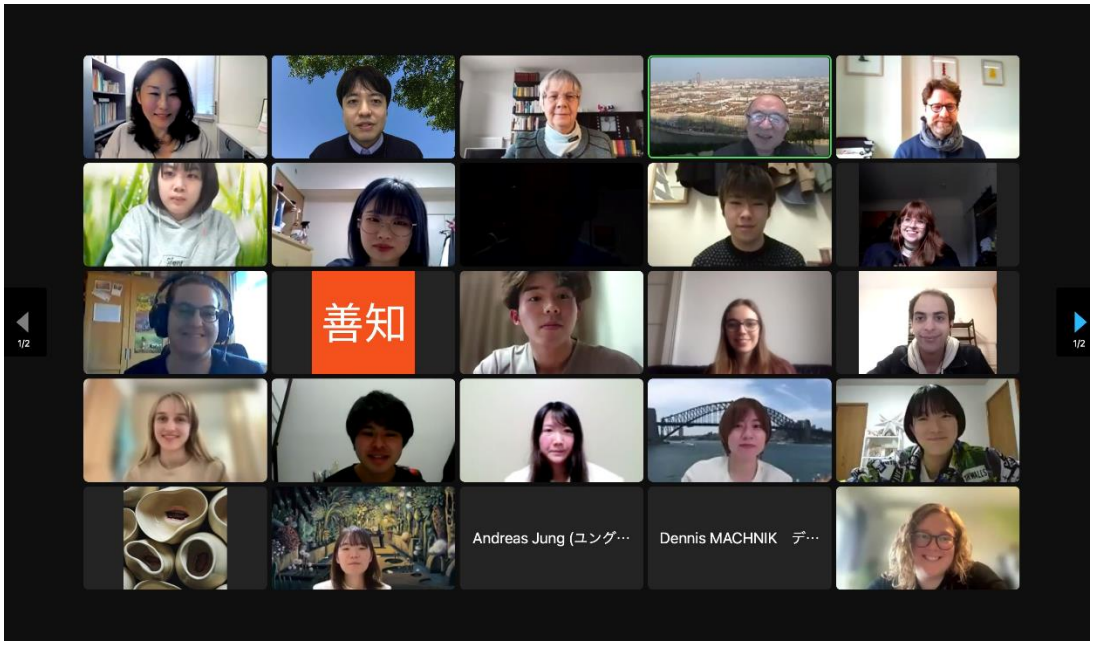
３．笠原先生はフランスに留まり、あえて仏語で劇脚本の創作を続けておられる。そして、(a)日本人に会うたびに、なぜ日本に戻って日本語で書かないのかと問われるが、答えられないということ。また、(b)一体あなたにとって仏語とは何なのかと問われても、答えられないということ。ただ、(c)今自分が仏語を手放すならば自分が自分ではなくなってしまうと感じるだろうということ。これらのことを笠原先生は明言はされなかったが、強烈に伝えておられたと思う。

４．逆に高田先生は以下を明言されていた。(a)national に対するのは、international ではなく、また global でもなく、transnational であるということ。(b)international においては national はそのまま維持されており、また global はと言えば、それは national とは異なった次元の空間だということ。(c)transnational だけが national と事を構え、われわれを national から脱出させるということ。ただし、(d)transnational はわれわれをまた別の national*に導き入れ（多分その national*は、笠原先生の言葉を用いれば、肌身ではなく衣服)、それは問題の最終的解決ではないということ。ただ、あらためて、(e)互いに確執しつつ、ともにそれぞれが現代の重大問題である national（偏狭なナショナリズム）と global（むきだしの自由主義）にわれわれが抗していくために、われわれが用いうる唯一の手立てが、transnational であろうということ。

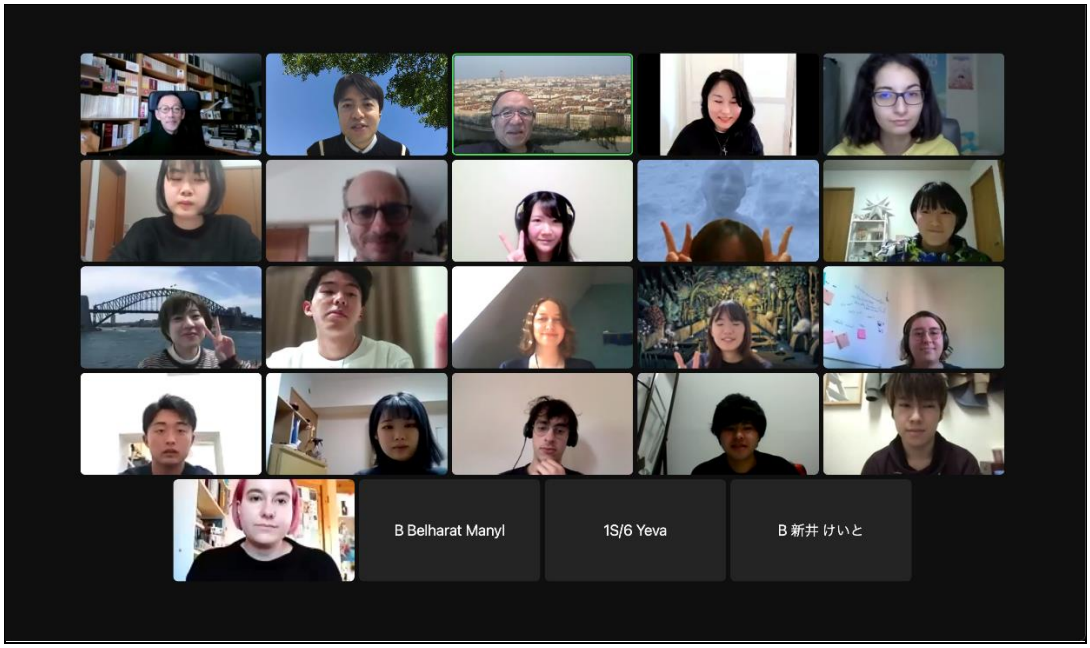
５．こうして、お二人の話を通じて、改めて気づかされたのは、「国際(international)哲学特講」も「国際(international)日本学」も、その実態において、またその使命において、international ではなく transnational な試みだということである。それらは、こうして、むしろ「transnational 哲学特講」や「transnational 日本学」と名乗るべきであるということになるであろう。

§５　スクリーン・ショットで見る研修の様子

◆ハイデルベルク大学との合同ゼミ



◆ストラスブール大との合同ゼミ



◆在ストラスブール総領事赤松武さんのご挨拶

◆アルザスのヴァーチャル・ヴィジット

◆若手教員レクチャー

◆OBOG たちとの会（イラストは OG 本間真帆さんの作です）